

【書評】

山内乾史・武寛子編著（2016）『学修支援と高等教育の質保証Ⅱ』 学文社

Book Review – Kenshi YAMANOUCI & Hiroko TAKE (2016) *Learning Support and Quality Assurance of Higher Education*

大西 好宣

ONISHI Yoshinobu

要旨 わが国の高等教育分野における新たな研究対象として、学修支援への関心が徐々に芽生えて来た。例えば、日本学術振興会が実施する科学研究費助成事業には、2013年に初めて学修支援がタイトルに含まれる研究課題が採択され、その後も年数件のレベルではあるものの、同様の研究が採択されるに至っている。本書評では、わが国における学修支援研究の嚆矢となった「学生の学力と学修支援に関する比較研究—日英瑞3カ国を中心に—」（研究代表者：山内乾史）の歴史的意義に着目し、その最終成果物である山内乾史・武寛子編著（2016）『学修支援と高等教育の質保証Ⅱ』（学文社）を批判的に読み解く。総じて、オリジナルの調査データや科学的なエビデンスは少ないものの、中には国際的な評価にも耐え得るであろう、価値のある成果も見られた。

1、背景

日本学術振興会が実施する科学研究費助成事業（科研費）において、「学修支援」が（採択された）研究課題名に初めて登場したのは、ようやく2013年のことである。その研究とは、神戸大学の山内乾史を代表者とする「学生の学力と学修支援に関する比較研究—日英瑞3カ国を中心に—」（基盤研究C）であり、山内（2015）『学修支援と高等教育の質保証Ⅰ』（以下、前著Ⅰ）はその最初の果実である。

評者は既に前著Ⅰを対象とした書評を發表しており（大西、2020d）、本稿はその続編となる。すなわち、山内による上記の研究には最終成果物として、山内・武（2016）『学修支援と高等教育の質保証Ⅱ』（以下、本書Ⅱ）が発行されており、本稿ではそれについて見て行くこととする。以前の書評（大西、2020d）でも触れたように、わが国における学修支援研究の嚆矢となった歴史的な業績を、現段階で振り返っておくことは、今後の研究の進展にとって大事だと考えるからである。

2、前著Ⅰの書評に関する補足

前著Ⅰの書評である大西（2020d）では、「課題名に学修支援の四文字が含まれている研究の開始年別採択数」として、計13件の研究課題を開始年によって整理してみた。

しかし、日本語の「学修支援」は英語の *academic advising* の訳であり、それをそのままカタカナ表記した「アカデミック・アドバイザー」という用語も、わが国では学修支援と同義で用いられているという実態がある。そこで、研究課題名にアカデミック・アドバイザーという用語が含まれている採択研究を科研費データベースで検索してみたところ、これまでに2件あることがわかった。本稿ではこれらを追加し、大西（2020d）の表1を次のように補足・微修正したい。

表1 学修支援及びアカデミック・アドバイジングに関する研究課題数（補足・修正版）

開始年	～2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	合計
件数	0	1	1	0	3	1	2	2	5	15

出典 科研費データベースより評者作成

3、本書Ⅱの概要と構成

本書Ⅱも前著Ⅰ同様、学修支援と高等教育の質保証という別の問題が扱われている。前者は良いとして、研究課題名としては直接言及のない後者が何故この研究に含まれていて、両者がどのように関係しているのかについて、評者には正直判然としない。

例えば、高等教育の質保証を扱った第9章及び第10章について、本書Ⅱのはしがき(vi)には、「第9章乾論文と第10章武論文は、それぞれラオスとスウェーデンの高等教育の質保証の問題について学修支援を中心に論じたものである」という、編者の山内による説明があるにはある。しかし、両章をどのように読んでみても、そこで扱われているのは徹頭徹尾、質保証問題であり、学修支援という用語自体、本文では一度も登場しない。誠に不可解と言わねばなるまい。

よって、今回も学修支援分野のみを分析の対象とし、質保証問題を扱った最後二つの章は扱わないこととしたい。この点、是非ご理解を頂ければ幸いである。なお、本書は冒頭のはしがきに続き、以下のような十の章による構成となっている。分析をしないと断った第9章及び第10章についても、参考として見出しを掲げておく。

第1章 少人数教育はいかなる環境において有効なのか？

1 はじめに / 2 初年次・少人数セミナーと「旧式FD」 / 3 授業改善からカリキュラム改革と「新式FD」へ / 4 自己修正力の向上

第2章 高学力層の大学新生が抱える不本意感と違和感—神戸大学での調査結果から—

1 はじめに / 2 大学新生の不本意感に関する先行研究 / 3 神戸大学の学生プロフィール / 4 神戸大学における学生調査結果 / 5 不本意感、違和感、期待感の三者関係 / 6 なぜ他の学生を低く見るのか？ / 7 考察—大学は学生にどこまで介入すべきか—

第3章 海外大学見聞録—北米・豪州・欧州のキャンパスで考えたこと—

1 はじめに / 2 北米の大学キャンパスで / 3 豪州の大学キャンパスで / 4 欧州の大学キャンパスで / 5 おわりに

第4章 アメリカ合衆国の学修支援

1 はじめに—学修支援を捉える視点— / 2 アメリカ合衆国における学修支援の歴史 / 3 アメリカ合衆国の学修支援の類型 / 4 おわりに—学修支援のこれから—

第5章 キャリア形成の視点から見る大学生の海外留学支援体制

1 はじめに / 2 先行研究 / 3 日本人海外留学者の増加傾向 / 4 日本の大学におけ

る海外留学支援状況 / 5 おわりに—効果的な留学支援体制に向けて—

第6章 私立大学の学修支援における教職協働の現状と課題—大学職員のかかわりに注目して—

1 はじめに / 2 私立大学における教育、学生支援に対する意識の高まり / 3 大学教育の質的改善への取り組みにおける大学職員への期待 / 4 学修支援プロジェクト実践からの検討—神戸松蔭女子学院大学を事例に— / 5 大学教育の質保証に大学職員はどのようにかかわることができるのか / 6 おわりに

第7章 高等教育を取り巻く「主体的な学び」の動向とその実践

1 はじめに—エビデンス・ベースドに基づく教育改革— / 2 「主体的な学び」の種類とその実践例 / 3 アクティブ・ラーニングの授業実践から—授業評価アンケート結果より—

第8章 保育者養成校におけるミクロ的な視点からの学修支援—「素話」の実践を支える方策—

1 「絵本の読み聞かせ」と「素話」の特徴—保育者養成校の学生の意識— / 2 保育現場における「絵本の読み聞かせ」と「素話」の実践状況 / 3 素話の実践の難しさとは何か / 4 素話の実践を支援する枠組み / 5 学修支援の効果測定 / 6 まとめ—ミクロな視点の学修支援の意義—

第9章 ラオス高等教育の現状と質保証システムの新たな展開

1 はじめに—ラオスにおける高等教育政策— / 2 ラオスにおける高等教育機関 / 3 教育の質保証と高等教育 / 4 アセアンにおける質保証の基準とラオスの位置づけ / 5 おわりに—質保証に関する今後の課題—

第10章 スウェーデンにおける大学教育の新しい質保証枠組の構築に向けた動向

1 はじめに / 2 大学の「質」と質保証枠組をめぐる国内外の議論 / 3 第二次質保証枠組の構築までの変遷 / 4 新しい質保証枠組の構築に向けた動向 / 5 おわりに

4、はしがきから第8章までを批判的に読み解く

前著Ⅰは編者である山内以下、計7人の著者による分担執筆となっていたが、本書Ⅱの執筆陣は計11人に増え多様性が増した。前著Ⅰでは執筆者の一人に過ぎなかった武が、本書Ⅱでは山内と共に編者として名を連ねており、或いはそのことが本書Ⅱ全体に良い影響を与えているのかもしれない。以下、順に見て行くことにしよう。

(0) 「はしがき」

編者・山内によるはしがきにおいて、第9章及び第10章の説明に疑義があることについては既に触れた。さらにもう一点、はしがきの中に小さな事実誤認があることもここで補足しておく。それは、「これまで高等教育研究の領域で学修支援と銘打って正面から刊

行された書物は不在のようである」という部分である。

確かに、学修支援という日本語の用語で検索すれば、当時の状況はここに書かれた通りだったかもしれない。けれども、本稿「2、前著Ⅰの書評に関する補足」で触れたように、アカデミック・アドバイジングという用語も学修支援と同義で用いられており、注意が必要である。

実際、清水（2015）による『アカデミック・アドバイジング その専門性と実践 日本の大学へのアメリカの示唆』（東信堂刊）という力作が前著Ⅰと同じ年に刊行されてもいる。微妙なタイミングではあるものの、ほぼ同じ時期に学修支援に関する複数の研究が実施されていたという事実はここで頭に留めておきたい。

(1) 「第1章 少人数教育はいかなる環境において有効なのか？」について

前著Ⅰで編者・山内の執筆した第1章について、評者は次のように結論づけた（大西、2020d）。

本章にあるのは、山内個人が体験した多くの逸話(エピソード)である。どれも事実(ファクト)なのだろうが、その視点は主観的であり、科学的・学術的な意味での論拠(エビデンス)やデータではない。

残念ながら、第1章に関する評者の印象は本書Ⅱでも全く同じである。何故、学術的な意義の薄いこうしたエッセイを学術書の顔とも言える第1章に据えるのか、多くの読者は理解に苦しむであろう。加えて、「こういったコーチングを通じて学生に成功体験を積み重ねることではないのということだ」(p.8.) といった、日本語として少々意味不明の表現もあり、研究の成果と呼ぶには問題の多い章である。

(2) 「第2章 高学力層の大学新生が抱える不本意感と違和感—神戸大学での調査結果から—」について

本章は研究の成果と呼ぶに相応しい内容を持つ、やっと登場した本格的な学術論文である。独自の調査によるオリジナルデータも満載で、それぞれの説明にも必然性や説得力が感じられる。何より、高学力層の通う大学にも不本意入学による違和感を抱える学生が一定数いるという事実を、調査と数値で明らかにした意味は大きい。

米国の大学においても、そうした違和感を抱える学生が大量におり、そのうち相当数が実際に中退まで至るという問題が深刻化している。学修支援専門職の職能団体である National Academic Advising Association (NACADA) においても、中退は毎年重要なトピックとして多くのセッションが開催される（大西、2018 & 2020b）。本章はそうした、研究のメインストリームに繋がる、日本からの知的貢献にもなり得る。

しかし、それでも敢えて苦言を呈するとすれば、最終項「7 考察—大学は学生にどこまで介入すべきか—」(p.37) が決定打を欠くのはいかなるものか、ということに尽きるだろう。第6項までに、神戸大学の学生が抱える問題を明らかにしたのは意義のあることとしても、ではどうすれば良いかという肝心の結論部分がタイトル通りの「考察」で終わってしまったのは何とも後味が悪く画竜点睛を欠く。望むらくは、前著Ⅰでこの現状が示さ

れ、本書Ⅱでその解決のための結論が明らかになるという構成であって欲しかった。高望みであろうか。

(3) 「第3章 海外大学見聞録—北米・豪州・欧州のキャンパスで考えたこと—」について

本章はその内容も記述ぶりも第1章のようなエッセイに近く、学術上の研究成果と言うよりは、担当者がその直前に実施する事前調査、もしくはその報告書か高尚な旅行記のような内容となっている。「見聞録」という、およそ研究書には似つかわしくない軽いタイトルがそうした特徴を自ずから物語っている。

そのタイトルにあるように、著者は北米・豪州・欧州で多くの大学キャンパスを訪ね、多くは現地で要職にある教職員にインタビューを敢行している。つまり、内容自体は多彩なので比較高等教育分野の読み物としてはそれなりの情報が詰まっているとも言えよう。

ただその内容は、学修支援に焦点を絞った、奥の深い専門的な内容ではなく、各大学の改革状況について表面的かつ総花的な情報を紹介するに留まっているのがかなり残念である。例えば、編者の山内と共に著者がメルボルン大学で学修支援施設に案内される下りが写真付きで紹介されているが (p.62.)、その施設で行われている具体的な支援活動の詳細について何故尋ねてみなかったのだろうか。本当の意味で価値のある情報はそこなのにと、読んでいて正に地団太を踏む思いがする。

また、イタリアのパドヴァ大学に関する記述がある (pp.70-71.)。けれども、著者が同大を訪れたのは1997年とかなり前のことであり、この研究とは別件での訪問という。この点にも正直違和感を拭えない。

(4) 「第4章 アメリカ合衆国の学修支援」について

米国における学修支援の歴史を紹介した章である。ハーバード大学がその起源であるなど、コンパクトだが参考になる内容がたくさん詰まっている。本書Ⅱの翌年に刊行された谷川 (2017) による『アメリカの大学に学ぶ学習支援の手引き』(以下、手引き) にも同様の章があり、学習と学修の違いはあるものの、両者を比べてみるのも面白いであろう。

例えば、本書Ⅱでは学修支援の起源を1700年代とするが、手引きでは学習支援のそれを1600年代とする。また、本書Ⅱでは学修支援の発展をその特徴から四つの時代に区分しているが、手引きでは六つの時代に分けている。もちろん、両者には差異だけでなく共通する部分も多い。その意味でも、比較することで初めて見えて来る事実や発見があるように思う。

(5) 「第5章 キャリア形成の視点から見る大学生の海外留学支援体制」について

評者の専門に近いからか、最も大きな関心を持って読み進めたのがこの章である。幸いにも、他の多くの章と異なり、学術論文としての体裁をきちんと踏んでおり、例えばややボリュームが少ないとはいえ先行研究にも目配りがされている点、また独自の調査によるオリジナルデータ及びその分析が含まれているなどの点は総じて評価出来る。

けれどもやはり、限界と思える部分にばかりどうしても目が向いてしまう。期待が大き過ぎたのかもしれない。本章に関する評者の最大の不満は、いわゆるシステム論に終始し

てしまっていることである。確かに、留学希望者のために留学説明会を催し、留学経験者として先輩を登場させるのはどの大学でも王道と言える手段であろう。

しかし、アンケートによって多くの大学が共にこうした手法を実践していることがわかったからと言って、一体何が教訓として得られるのであろう。或いは研究対象となった各大学が、システムとしてそうしたイベントを定期的実施しているからと言って、それがタイトルにある「大学生の海外留学支援体制」の全てなのであろうか。さらに、こうしたイベントに関わる教職員自身のどの程度が海外留学を経験しておらず、さらにその支援のための専門性を持たない者はどれくらいなのだろうか。

本章で明らかになっていない事柄は多い。それゆえ、評者は第2章に感じたのと同じ不満を抱いてしまう。つまり、前著Ⅰでこの現状が示され、本書Ⅱでは残された未解決の問題をさらに解き明かすという構成であって欲しかった、というものである。これも高望みなのであろうか。

(6) 「第6章 私立大学の学修支援における教職協働の現状と課題—大学職員のかかわりに注目して—」について

いわゆる大学職員論の系譜に繋がる論文であろう。中でも教職協働は比較的取り上げられることの多いテーマであり、事務職員と教員の双方を経験した著者ならではの問題意識とも言える。

その意味で、著者の主張には大いに共感出来るし、参考・教訓となる記述も多い。従って、本書の中では比較的関心を持って読める章であることは確かなのだが、他方で明らかな限界があることも残念ながら認めざるを得ない。

その一つは、本章で紹介されているケーススタディが神戸松蔭女子学院大学という単一の大学の事例であること、残る一つはわずか2人（教員P及び職員S）への聞き取り調査であるという点である。後者については、その内容が質的に深く掘り下げられているという印象はなく、かと言って量的な側面から科学的な統計処理がなされているわけでもない。

日本にある800近い大学には、何万人、何十万人という教職員が勤務しており、そこには大小様々な問題があるだろう。わずか2人の短い意見でそれらを代表させることは到底出来ない。つまり本章で提示されている内容は、そういうこともあるかもしれない、と参考程度に受け止めるのがおそらく正しい姿勢であろう。

(7) 「第7章 高等教育を取り巻く「主体的な学び」の動向とその実践」について

近年流行しているアクティブ・ラーニング型授業の類型整理と、授業実施に伴う学生アンケートをまとめたものである。前者に関わる知識は、現代では既に多くの大学人に共有されており、後者のアンケートにしても多くの教育現場で組織的に、また教員個人によって実施されているものと推察する。従って、本章では著者による授業アンケートの結果としてオリジナルのデータも提示されてはいないものの、残念ながらそれほど新味は感じられない。

(8) 「第8章 保育者養成校におけるミクロ的な視点からの学修支援—「素話」の実践を支える方策—」について

前著Ⅰ「第3章 学修支援の視点に立った保育者養成校の授業構築—協同学習と絵本を活用した論理的思考力の育成に着目して—」の続編といった内容である。保育者養成のための挑戦的な教育実践としては大層興味深く読んだものの、本章で紹介されている調査の方法論や分析については学術的な疑義なしとしない。

例えば、当該調査 (p.167.) では、学修支援を実施しなかった学生群 (仮にサンプル1とする) と実施した学生群 (同じくサンプル2) とを比較し、実施した学生の方が絵本の読み聞かせの際に保育園児からより大きな関心を引き出せたと結論づけている。しかし、サンプル1と2の読み聞かせの実施には時間差があるようだ。してみると両者の差は、学修支援の有無から生じたものではなく、単に学生たちの慣れや経験の問題ではないのだろうか。同じ頁 (p.167.) で「学習」支援と「学修」支援という二つの用語が混在していることも読んでいて混乱する。

また、本章では著者の実施した三つの調査が紹介されている。けれども、そのうち二つは2010年及び2012年の調査で、本書の元となった科研費採択研究「[学生の学力と学修支援に関する比較研究—日英瑞3カ国を中心に—]」が開始される2013年以前のものである。この点についても評者は違和感が拭えない。

引用及び参考文献 (アイウエオ順)

- 大西好宣 (2016) 「書評：アカデミック・アドバイジング その専門性と実践 日本の大学へのアメリカの示唆」『人文社会科学研究』第33号、pp.120-123., 千葉大学
- 大西好宣 (2018) 「アカデミック・アドバイジング (学修支援) の現在と未来：米国 NACADA 2018 年次大会に参加して」『大学マネジメント』Vol. 14. No. 8, pp.37-45., 大学マネジメント研究会
- 大西好宣 (2020a) 「書評：アメリカの大学に学ぶ学習支援の手引き」『人文社会科学研究』第40号、pp.227-231., 千葉大学
- 大西好宣 (2020b) 「米大学における学修支援専門職の関心領域及び役割：日本への教訓」『JAILA JOURNAL』第6号、pp.58-70., 日本国際教養学会
- 大西好宣 (2020c) 『海外留学支援論 グローバル人材を育てるために』 東信堂
- 大西好宣 (2020d) 「書評：学習支援と高等教育の質保証Ⅰ」『人文社会科学研究』第41号、pp.151-156., 千葉大学
- 清水栄子 (2015) 『アカデミック・アドバイジング その専門性と実践 日本の大学へのアメリカの示唆』 東信堂
- 谷川裕稔編 (2017) 『アメリカの大学に学ぶ学習支援の手引き』 ナカニシヤ出版